

日本旧石器学会

ニュースレター 第56号 NEWS LETTER No. 56

JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



腰岳黒曜石原産地をめぐる近年の研究動向

芝 康次郎

1. 腰岳黒曜石原産地をめぐる既往研究

腰岳は、九州島の北西部、佐賀県伊万里市から西松浦郡有田町に所在する標高487mの円錐形の山塊である。今でこそ、ここが黒曜石原産地であることは周知のところであるが、それが学界に示されたのは戦後のことである（河野1950）。ただ、この時点で腰岳山腹の玄武岩と流紋岩の接触部に黒曜岩熔岩が存在することが知られていた。

腰岳黒曜石原産地の本格的な考古学的調査は、1961年の明治大学（日本考古学協会西北九州特別調査）による平沢良遺跡、鈴桶遺跡の調査（杉原・戸沢1962、杉原他1965）にはじまる。この2つの調査により、腰岳が先史時代の黒曜石原産地遺跡であることが確認され、その後の腰岳山腹（標高100～200m）における小木原遺跡や鈴桶遺跡の緊急調査により、数十万点の石器が出土するに及んで、ここが一大石器生産地点であることが改めて確かめられた。このように、考古学的調査は腰岳北側の山腹（標高200m以下）から山麓にかけての遺跡でおこなわれ、2000年までに知られていた遺跡も、北側山腹にほぼ限定されていた。一方、地質学的には、長岡信治らによって、腰岳の基盤となる玄武岩溶岩（北松浦玄武岩類）に重なる、厚さ60～70mの有田流紋岩の下底部（標高400m付近）に黒曜石溶岩流を伴うことが確認された（長岡他2003）。

先史時代人類は黒曜石を求めてどこまでアプローチしたのか、現在の遺跡群のあり方は実態をどれほど反映しているのか。この点に着目した私たちは、長岡ら（2003）が示した露頭付近を踏査したところ、未知の黒曜石露頭とその直下の遺跡（遺物散布地点）を発見した。この重要性に鑑み、2014年に腰岳黒曜石原産地研究グループ（以下、研究グループ）を組織し、腰岳の悉皆踏査（露頭、原石分布とその産状、遺跡の有無）を開始した。以来、2024年2月時点で標高150mまでに13回の踏査を重ねている。ここでは、研究グループによる成果（腰岳黒

曜石原産地研究グループ2014、2017、2020）をもとに、黒曜石露頭および原石分布、遺跡の産状と石器群の内容について概要を示す。加えて、西北九州の黒曜石研究に関する課題を述べたい。

2 腰岳原産地での調査成果

（1）黒曜石露頭、産状、遺跡分布

図には、腰岳山腹からその周辺にかけての黒曜石露頭、原石散布地点、遺跡（旧石器～縄文が主と思われる）をそれぞれ示した。

黒曜石露頭は、かつて長岡ら（2003）が示したとおり標高400～420m付近に存在する。灰白色の流紋岩溶岩の流理中に、最大厚さ30cmのレンズ状に黒曜石部分があり、その周辺には夥しい数の黒曜石角礫が散乱している。これらのことから、黒曜石を含む流紋岩上部は腰岳の頂上付近で溶岩ドームを形成しており、その周縁部に黒曜石が形成されたと考えられる。有田流紋岩の噴出年代が280万年前と推定されており（宇都他2002）、K-Ar年代も 2.76 ± 0.16 Maであり（Kaneoka and Suzuki 1970）、矛盾はない。現在、腰岳山腹には現在でも黒曜石礫が数多く分布するが、これは露頭の大部分が崩落、開析されたためと考えられる。

黒曜石露頭付近は全体として急斜面をなしており、多量の黒曜石角礫（拳大以下主体）が表層集中をなす。そして一部では石器も確認できる。これら露頭直下の諸遺跡では露頭直下の転礫（角礫）を用いて石器生産がおこなわれる。とくに西斜面側では、縄文時代後期に盛行する鈴桶型石刃石器群が濃密に分布する（No.43等：図）。南斜面には鈴桶型とは明らかに異なる、石核調整や頭部調整が認められず水和層が発達した縦長剥片石核や打面を大きく残す縦長剥片も確認されており、その技術形態的特徴から旧石器時代のもと考えられる。

黒曜石露頭から下った標高300～350m付近では、南斜面を除いて多くの遺跡が認められる。これ

は原石分布の多寡や原石の石質とも対応しており、西斜面には多量の良質な原石とともに遺跡が分布する。そして南西斜面では、石刃製の基部加工ナイフ形石器や横長剥片など後期旧石器時代後半期の特徴を有する石器群が存在する(No.141:図)。さらに、標高300m以下でも水層の発達度合の異なる石刃や石刃石核が存在しており、やはり旧石器時代から縄文時代にかけての断続的な人類活動の存在を示唆する。さらに、腰岳中腹(標高200m付近)の北西の緩斜面には、標高200m以上で唯一発掘調査が行われている小木原遺跡がある。道路工事に伴って実施された発掘調査では、520㎡の調査区から7,721点の石器が回収されている(島内編2002)。石刃製の基部加工あるいは、一側縁加工ナイフ形石器や裏面平坦加工を伴う台形石器等の定形石器が出土しており、後期旧石器時代前半期から後半期前葉にかけての石器群と考えられる。

一方、東斜面や南斜面の原石は球顆や斑晶を含むものが多く、量も相対的に少量である。これに対応して標高300~350m付近の東~南斜面では石器はほとんどみられない。しかし、北東斜面の標高300mより下方では、良質な原石の分布量も相対的に増え、石器の散布も認められるようになる等、上方とは明らかに異なる様相が認められる。以上のような北側山腹に遺跡分布が顕著になる様相は、鈴桶遺跡など下方の北麓遺跡群と連続的なあり方を示している可能性がある。なお、石器とともに採集した原石の形状分析によると、標高250mより下位で角礫から亜角礫へと徐々に変化する。

(2) 腰岳低標高部から山麓の遺跡群

既往の調査によって、北側の標高200m以下の山腹から山麓での様相が明らかになっている。標高100m付近の鈴桶遺跡や法華遺跡、柱引遺跡はそれぞれ小規模な尾根上(緩斜面ないし平坦面)に立地する。これらの遺跡は基本的には縄文時代後期を中心とした鈴桶型石器群と考えられるが、風化が強く打面を大きく残す石刃の存在があり、これらは旧石器時代に遡る一群と考えられる(小畑2002)。また、柱引遺跡ではナイフ形石器が採集されており、やはり標高100m付近の北山腹も旧石器時代からの断続的に利用されていたことを示唆する。

山麓の石器群には平沢良遺跡がある(杉原・戸沢1962)。この遺跡では、剥片尖頭器のほか、石刃製のナイフ形石器、台形石器、搔器などが出土している。AT降灰前後~後半期の複数の段階に位置づけられ(杉原2013, 杉原編2017)、前述のとおり腰岳中腹の小木原遺跡と並行する石器群も含まれると考えられる。

以上のように、黒曜石露頭から山麓にいたる黒曜

石産状と遺跡との関係が明らかになりつつある。これらの地下情報について、発掘調査が限られている現状では鈴桶遺跡や平沢良遺跡等の情報が貴重であるが、調査が古くテフラ分析等の環境史的分析も行われていない。山腹の土壌堆積は決して良いとは言えないが、今後意識的な検証作業も必要である。

(3) 岩石学的検討

研究グループは、腰岳山腹の調査とともに、地質的、岩石学的調査も併せて調査を行っている。黒曜石の由来となる有田流紋岩は腰岳だけではなく、その南方の牧ノ山や青螺山、そして黒髪山にも広がる。それらの全岩定量分析によると、腰岳山腹の露頭を含む黒曜石は均質な元素組成を示すため、同源マグマに由来するものと考えられる一方、黒髪山北部の流紋岩質火砕岩中の礫には、これらとは異なる元素組成が見出された(亀井他2016)。黒曜石~ピッチストーンの大多数を占める前者を有田流紋岩A、後者の火砕流中の礫を有田流紋岩Bと呼称し、区別するが、基本的に後者は石器石材には不適に礫であり、現状では有田流紋岩Aが石器石材として用いられていたと考えられる。

これとは別の問題として、いわゆる牟田産黒曜石の問題もある。これは1980年代には知られていた円礫の漆黒色黒曜石で(坂田1982)、化学分析では、腰岳産黒曜石と同様の元素組成を示す(長岡他2003)。現在でも小円礫が採集可能な長崎県松浦市の星鹿半島の牟田では、流紋岩体は存在しないため、黒曜石はおそらく海岸段丘形成に伴う二次堆積として包含されるに至ったと評価される。円礫化した漆黒色黒曜石は、西北九州の旧石器時代遺跡ではむしろよく利用されるが(例えば磯道遺跡)、これらを化学分析しても腰岳山腹産とは区別できない(長岡他前掲)。このため両者を統合して、「腰岳系」黒曜石と呼称している。現状では、礫表皮によって見分けるしか方法がないが、こうした一次産地、二次産地問題は針尾や椎葉川にも共通しており、西北九州黒曜石原産地の前提的問題として念頭に置いておく必要がある(芝2018)

3 腰岳系黒曜石の利用

(1) 原産地推定結果に基づく利用動向

先行研究や、これまでに実施された蛍光X線分析に基づく原産地推定により、通史的な利用動向が以下のように明らかになっている。

A. 旧石器時代

後期旧石器時代初頭から腰岳系黒曜石の利用が中九州西部において確認でき(石の本:森先他2022)、前半期前葉の台形様石器群では、北部九州のほぼ全域、そして阿蘇周辺地域にまで分布する

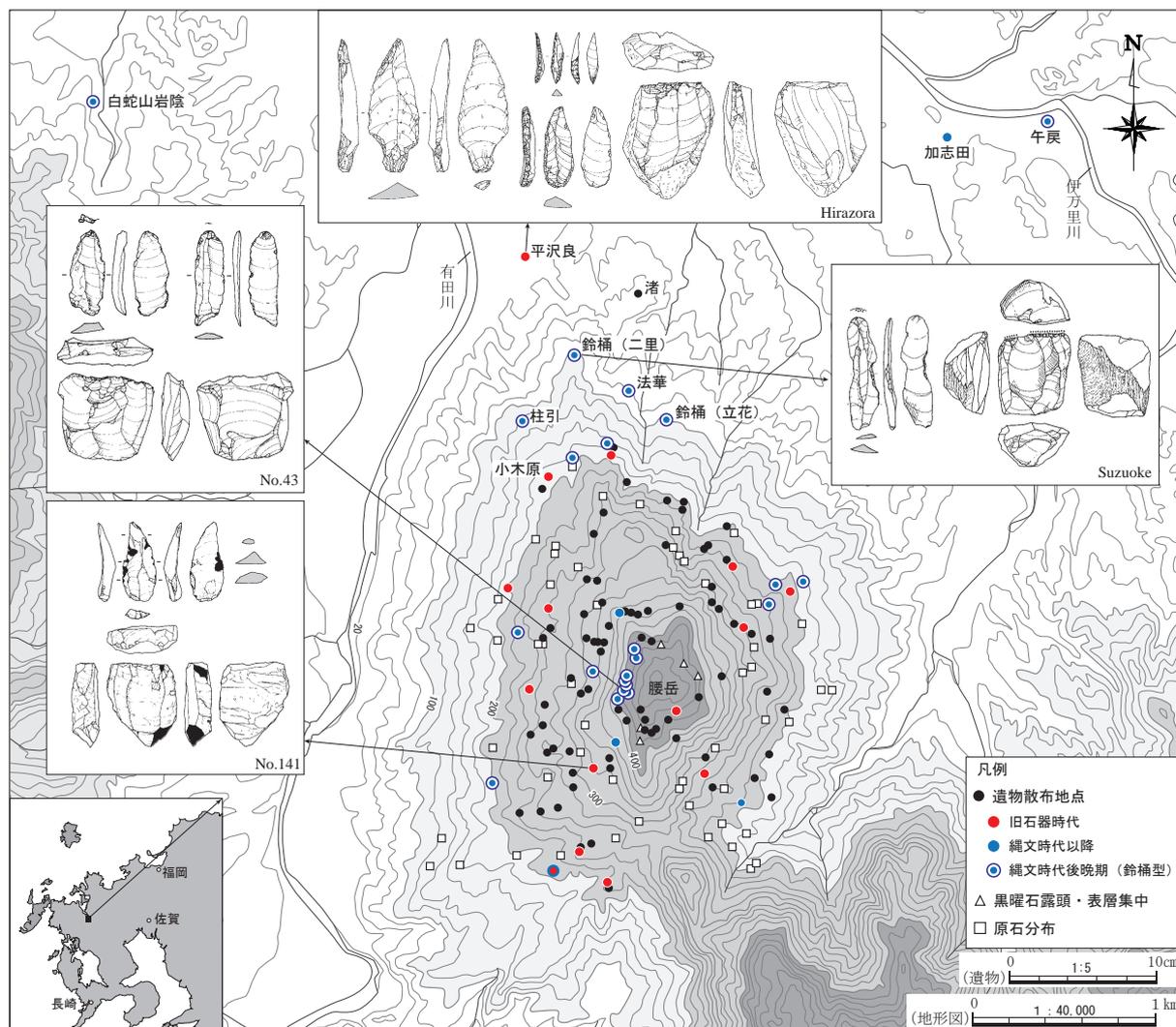


図 腰岳黒曜石原産地とその周辺の遺跡（石器採集地点）および原石分布（2024.2現在）

（河原第14等）。後者では、基本的に素材や定形石器で構成され、消費プロセスの後半段階の石器群と評価できる。AT直下の石刃石器群でも同様の傾向にある。島原半島の龍王遺跡倉知川地区AT直下石器群（辻田編2007）では、垂角礫を用いた石刃製二側縁加工ナイフ形石器が製作されており（芝2017）、消費地遺跡での確実な「腰岳産」黒曜石石器群といえる。

後期旧石器時代後半期（AT上位）には、北部九州と中九州西部全域のほか、南九州西部の薩摩半島において利用が認められる。その初源は、AT降灰からやや時間を置いた今峠型ナイフ形石器盛行期（堂園平等）である。南九州では、角錐状石器群やそれに次ぐ小形ナイフ形石器・台形石器群での利用痕跡は不明瞭である。

細石刃石器群では黒曜石利用の高まりに比例して、腰岳系の利用頻度も増大し、現九州島全域での利用が確認できる（山口県宇部台地周辺含む）。細石刃期前半には、阿蘇周辺地域でも腰岳系黒曜石を

主体的に用いた細石刃生産が行われ、南九州東部にも細石刃が搬入される。さらに同後半には、それまで腰岳系黒曜石がほとんど認められなかった中九州東部や南九州東部においても細石刃生産が認められるようになる。細石刃期には石材消費（あるいは供給）のあり方に変化が生じていると考えられる。もう1つ注目できるのは、この時期に「腰岳産」黒曜石が中九州や南九州で利用され、これに対して北部九州では、いわゆる牟田産が利用されていることである。これは地域集団による黒曜石獲得のあり方の違いを示すと考えられる（芝2016）。

旧石器時代の消費動向として重要なのは、朝鮮半島での利用のあり方である。全羅南道の新北遺跡では、細石刃石器群に伴う腰岳産黒曜石製石器（剥片）の存在が明らかにされている（Lee and Kim 2015）。さらに最近では、蔚山市の新華里遺跡等でも西北九州産黒曜石製の石器が見つかった（張・金2018）。いずれもK/H（Koshidake/Hariojima）産と推定されており、石器がいずれも

剥片であることから、所属時期を確定できるものではない。とはいえ、これらが確かならば、対馬海峡を隔てた人間集団の直接的な移動を裏付けるものとなる。

B. 縄文時代

北部九州では、縄文時代を通じて腰岳系黒曜石が打製石器の主要石材として利用される。南九州の縄文時代草創期石鏃石器群では、遺跡近傍産石材志向が強まる（宮田1996）が、早期には再び中九州東部や南九州へ搬入されるようになる。中九州東部では、早期前葉から中葉に別府湾沿岸にまで広がり（志賀2002）、南九州では、石鏃の石材として早期中葉以降、腰岳等の西北九州産黒曜石の利用が増える（馬籠1999、藤木2002）。種子島への搬入も早期後半に確認できるので（奥嵐・東前平1）、南九州全域で連動したあり方と理解できる。

縄文時代早期末から前期には対馬での利用が確認でき（越高）、これとほぼ同時期に韓半島南海岸および島嶼地域（安島カ）への搬入が確認できる（李2013）。縄文時代前期～中期には、韓半島南部海岸地域の複数遺跡で確認できる（田中・古澤2013）。南方への展開のうち注目できるのは、薩摩半島西海岸沿いの原石集積遺構である（南田代）。遺跡は薩摩半島南部の万之瀬川流域の自然堤防上に立地しており、陸揚げ基地のような性格を有していたのだろう。

中期後半以降に盛行する黒曜石製鋸歯尖頭器（石銛）および鋸歯縁石器（石鋸）は、九州西部海岸域から韓半島南部にかけて広域展開する（山崎1989）。この石器は、薩摩半島南部でも出土しており（芝原・渡畑）、九州島の西岸全域を舞台とした海洋漁撈民の存在を示す。この時期に前後して出現するのが鈴桶型石刃石器群であり、腰岳での多量の石刃生産と連動するように、北部九州を中心に北は対馬（佐賀貝塚）や韓半島南部（東三洞貝塚）、南は鹿児島県大隅半島（柘原貝塚）にまで分布する（芝2018）。

縄文時代後期末～晩期には、腰岳産黒曜石の分布が最も広がる。すなわち、東は近畿地方、四国地方中央部、南は沖縄本島およびその周辺島嶼部にまで達する（小畑ほか2004、芝2018、上峯2018）。これらの分布限界の石器は小型の石鏃や剥片等であり、両極技法を用いるなど、かなり消耗された状態で搬入されている場合が多い（小畑ほか2004）。晩期には十郎川技法とよばれる、臨機的な小型矩形剥片剥離技術に変化する（橘1984）。九州島外に分布が大きく広がるはこの段階であり、この時期には海上交通による石材流通を示すように、海浜部に黒曜石原石の集積遺構が分布する特徴がある（吉留

2009）。この時期の分布拡大は組織的なフローシステムが存在を想起させるもので、その後の社会的ネットワーク形成に重要な役割を果たしたものと考えられる（山崎2020）。

4. まとめ—腰岳黒曜石原産地の特質—

研究グループの一連の調査によって、腰岳山腹での黒曜石露頭や遺跡分布、産状が明らかとなり、従来、腰岳北山腹が中心と考えられていた先史時代の黒曜石獲得・生産活動域が、山腹全域に及ぶことわかってきた。最も大きな成果は、黒曜石露頭周辺にも遺跡が展開していることであり、これは角礫石器群としてより山麓に近い石器群とは区別できる。この事実は、先史時代人が原産地を、いつ、どのように利用したのか、という点を解明する重要な手がかりと言え（芝2017）、今後詳細な調査研究が必要である。

また、原産地と消費地の連動性という観点でみると、後期旧石器時代初頭以降、①後期旧石器時代中葉、②縄文時代早期～前期、③縄文時代後期～晩期にそれぞれ画期といえる現象が起こる。①の時期には、腰岳山腹・山麓での石器群の存在（小木原・平沢良）と、南九州への黒曜石の分布拡大がみられる。この時期はAT災害後の再居住の時期とも重なり、石器群の変化と石材利用、さらには居住形態の変化が連動して起こっている可能性がある。③の時期には腰岳山腹にも人類活動の痕跡をみることができ、先史時代人が山腹にまでアプローチして黒曜石を獲得、生産していたことが確実である。これらの時期に加えて、後期旧石器時代末葉の細石刃期にも消費地遺跡の地理的分布が大きく拡大する。今後、これらの連動性がなぜこの時期に起こったのか、その背景を探っていかなければならない。

※引用文献は紙幅の都合で2020年以降のものを掲載する。なお、2020年以前の引用文献および腰岳に関連する文献は下記に掲載しているので、参照されたい。

○芝康次郎編 2020『シンポジウム日本列島の中の腰岳黒曜石原産地』腰岳黒曜石原産地研究グループ研究報告第2集（全国遺跡報告総覧でも公開中）

<2020年以降の文献>

森先一貴・芝康次郎・角縁進・隅田祥光2022「石の本遺跡にみる行動的現代性」『旧石器研究』17：71-86頁。

2024年度 日本旧石器学会第22回
総会・研究発表・シンポジウムについて

2024年6月22日（土）・23日（日）に岡山理科大学において、下記のとおり、日本旧石器学会第22回総会・研究発表・シンポジウムを開催します。

23日（日）に開催するシンポジウムのテーマは、「湧別技法：展開とその背景」です。湧別技法は、日本列島において広域に分布しているのみならず、ユーラシア大陸側では中国北部からベーリングアにまで分布が及んでいることが確認されています。本シンポジウムでは、この拡散過程とその背景を探るために、各地での湧別技法の分布、拡散年代、技術や利用石材の変化、同時期の他石器群との関係などに関する現状の知見を整理し、比較検討を試みることで、今後の研究の展望を議論することを目的とします。

一般研究発表・ポスターセッションの発表者・題目については、学会ホームページでご案内いたします。

2024年6月22日（土）

会場：岡山理科大学

（岡山県岡山市北区理大町1-1）

総会・研究発表会場：岡山理科大学理大ホール

（岡山キャンパス C1号館 8階）

○総会（13：00～14：00）＊12：00受付開始

○学会賞授賞式（14：00～14：10）

○一般研究発表（14：20～17：10）

＊一件20分（質疑込み、休憩10分）

終了時間は多少前後する可能性があります。

○懇親会については実施を計画中です。会場・開始時間・申し込み方法などについては、学会ホームページでご案内いたします。

2024年6月23日（日）

シンポジウム会場：岡山理科大学理大ホール

（岡山キャンパス C1号館 8階）

ポスター会場：岡山理科大学理大ホール

（岡山キャンパス C1号館 8階）

○シンポジウム 『湧別技法：展開とその背景』

（9：20～12：10）＊9：00受付開始

・研究企画委員「趣旨説明」

・青木要祐「東北・北陸地方への湧別技法の展開」

・堤 隆「関東・中部地方への湧別技法の展開」

・光石鳴巳「近畿・中四国地方への湧別技法の展開」

・加藤真二「中国北部における湧別技法の展開」

・平澤 悠「東シベリア・ベーリングアにおける湧別技法の展開」

＊一件30分（質疑込み、休憩10分）。

<昼食休憩 12：10～14：00>

○ポスターセッション・コアタイム

（13：00～14：00）

＊ポスターは22日から掲示可能です。コアタイム終了後に撤去して下さい。

○パネルディスカッション（14：00～15：00）

シンポジウム報告者全員、司会（研究企画委員）

○講評（15：00～15：10）

○若手奨励賞発表・閉会（15：10～15：30）

会場案内

岡山理科大学（岡山県岡山市北区理大町1-1）

JR岡山駅から岡電バス「47 岡山理科大学」行で約20分、岡電バス「37 理大東門」行で約30分、タクシーで約15分、またはJR法界院駅（岡山駅から1駅目）から徒歩で約20分

（<https://www.ous.ac.jp/access/okayama/>）

＊学内の学生食堂やコンビニなどの施設は土日が休業日となっていますので、昼食は事前に購入して持参していただくことをお勧めします。

宿泊

宿泊の斡旋はいたしませんので、各自でご手配ください。

参加申込

同封のハガキに必要事項をご記入の上、5月31日までにご投函ください。また、やむをえず総会を欠席される場合は、同ハガキ下段に記載された委任状にご記入・ご捺印の上、ご返送くださいますようお願い申し上げます。会則第5条により、全会員の5分の1以上の出席（委任状を含む）をもって総会が成立します。

（研究企画委員会）

2023年度 日本旧石器学会 研究グループ活動報告

旧石器基礎研究・次世代育成グループ（パレオ・ラブ）

旧石器基礎研究・次世代育成グループ＝通称パレオ・ラブでは明治大学黒曜石研究センターと共催で、10月7日・8日・9日の3連休において「信州鷹山 旧石器研究ワークショップ」を長野県長和町の明治大学黒曜石研究センターを主会場で実施した。参加者は、大学院生6名・学部生10名、社会人5名、講師10名の計31名、参加大学は、北から、東北大・東北学院大・松本大・早稲田大・明治大・大正大・愛知学院大・南山大・奈良大であった。

◆10月7日：太田光春学芸員による黒曜石体験ミュージアム見学の後、小野昭（元日本旧石器学会長）さんによる「旧石器時代研究のフレームワーク」の講義が始まった。小野さんは自らの学部時代の卒論を持参され、学生時代にどう研究の針路を見出すのかを語られた。続いて池谷信之（明治大学黒曜石研究副センター長）さんが黒曜石原産地推定の原理を講義、諏訪間順（明治大学黒曜石研究センター）さんは「旧石器時代史を編む」とし相模野台地の編年研究の実践例を示した。

◆10月8日：中村由克（明治大学黒曜石研究センター）さんから、「石器石材の見方」と題し遺跡出土の多様な石器石材をどう鑑定するかの観察ポイントが示された。次いで石器製作者である大場正善（山形県埋蔵文化財センター）さんから石器製作の理論講義と実演がなされた。昼は須藤隆司さん（明治大学黒曜石研究センター）の案内で会場前に広がる鷹山遺跡群を見学、ローム層からは黒曜石の旧石器がひょっこり顔をのぞかせていた。午後は、鈴木美保さん（東京大学総合研究博物館）と金彦中さん（東北大学大学院）の指導のもと参加者自身が製作を行った。石器製作と並行し、黒曜石研究センターの分析室で黒曜石の原産地推定が池谷副センター長の指導のもと実践され、参加者の持参した石器のひとつが高原山産黒曜石と同定された。

◆10月9日：最終日は原産地見学。大竹憲昭さん（明治大学黒曜石研究センター）の案内で、鷹山の星糞峠黒曜石原産地とその展示館である星くそ館を見学、縄文時代の黒曜石採掘坑やその地層断面などを観察した。その後、堤隆（パレオ・ラブ）の案内で、車に分乗し旧中山道を上って和田峠西地点の原産地を見学、ビーナスラインを通り八島湿原から星ヶ台黒曜石原産に入った。斜面に耀く黒曜石の無数の小片に、みな心を奪われていた。以上をもって3日間の旧石器ワークショップは無事終了した。

（堤 隆）

日付	時間	内容	講師
10月7日	14:40～15:20	黒曜石体験ミュージアム見学	太田 光春
	15:30～16:40	旧石器時代のフレームワーク	小野 昭
	16:40～17:40	黒曜石産地推定の原理と実践	池谷 信之
	17:50～18:50	旧石器時代史を編む	諏訪間 順
10月8日	8:30～9:30	石器石材の見方	中村 由克
	9:30～12:00	石器製作（講義と実演）	大場 正善
	12:00～13:30	鷹山遺跡群 見学	須藤 隆司
	13:30～17:00	石器製作ワークショップ（参加者全員）	鈴木 美保・金 彦中
10月9日	8:30～10:00	星糞峠黒曜石原産地および星くそ館 見学	大竹 憲昭
	10:00～12:00	和田峠 星ヶ台黒曜石原産地 見学	堤 隆



ワークショップ参加者（於：明治大学黒曜石研究センター）



大場正善さんによる石器製作の実演

日本旧石器学会役員 選挙結果のお知らせ

2024年3月1日～20日に郵送で行われた次期日本旧石器学会役員選挙の投票につき、開票作業を3月23日に行いました。集計結果を下記の通り報告します。なお、今回の選挙当選者は本年6月22日開催の総会で承認を受けた後、次期役員となる予定です。

1. 場所：東京都新宿区内
2. 日時：2024年3月23日 10時00分～12時00分
3. 開票作業

諏訪間順（選挙管理委員長）、下岡順直（選挙管理委員）、大谷薫（選挙管理委員）、森先一貴（総務委員長）

4. 得票数

- | | |
|-------------|-------|
| 1) 郵送投票枚数 | 124枚 |
| 2) 郵送有効投票枚数 | 124枚 |
| 3) 投票数 | 1164票 |
| 4) 有効投票数 | 1159票 |

5. 当選者

7地区の上位得票者1名(○印)と、それ以外の得票数上位15名が当選。以上の当選者の他、得票数が1票～2票の方が21名いました。その合計は24票です。(選挙管理委員会)

氏名	投票数	地域	順位
青木要祐 あおきようすけ	52	中部	6
岩瀬 彬 いわせあきら	55	関東	5
上峯篤史 うえみねあつし	43	中部	10
氏家敏之 うじけとしゆき	51	中四国	○
大竹憲昭 おおたけのりあき	59	中部	4
大場正善 おおばまさよし	46	東北	9
尾田識好 おだのりよし	50	関東	8
鹿又喜隆 かのまたよしたか	65	東北	○
小原俊行 こはらとしゆき	41	近畿	11
佐野勝宏 さのかつひろ	65	東北	3
鈴木美保 すずきみほ	67	関東	1
堤 隆 つつみたかし	84	中部	○
仲田大人 なかたひろと	37	関東	13
中村雄紀 なかむらゆうき	40	北海道	○
長崎潤一 ながさきじゆんいち	87	関東	○
夏木大吾 なつきだいご	39	関東	12
野口 淳 のぐちあつし	66	関東	2
間直一郎 はざまなおいちろう	9	関東	15
橋詰 潤 はしづめじゆん	34	中部	14
洪 惠媛 ほんへうおん	51	中四国	7
松本 茂 まつもとしげる	54	九州沖縄	○
三好元樹 みよしもとぎ	45	近畿	○

出版情報

新刊紹介

小野 昭著 『ドナウの考古学 ネアンデルタール・ケルト・ローマ』, 234頁, 吉川弘文館(歴史文化ライブラリー589)。2024年3月1日発行。

ドナウ川は聞いたことがあるけど、その源流域とか上流域となるといまいちピンとこなくなる方もいるだろう。私もそうだ。そんな方は昔に習った、ギュンツ、ミンデル、リス、ヴェルムといった氷期区分を思い出すと良い。これらの標識地があるのがこの地域である。また、教科書に載るような学史的に著名な考古遺跡が密集していることでも知られている。そのなかには発掘があらたに行われ、貴重な発見が報じられる遺跡も少なくない。

本書は、ヨーロッパ第四紀研究のメッカともいえる地域の主要な考古遺跡からみる通史である。さらには記念物保護の法的制度の紹介もあって、この一冊でざっとドイツ考古学の概要を見渡すことができる。ただし、本書の主張はこれにとどまらない。著者がこれまで行ってきたドイツでのフィールドワークの成果を「比較考古学」という俎上にあげて読者に一考をうながす、そこにもっとも重心が置かれている。

内容は、「ドナウ川と考古学」、「氷河時代狩猟民の生活世界」、「後氷期と畜農耕民の出現」、「青銅器・鉄器時代からローマによる支配まで」、「埋蔵記念物の保護とその広がり」、「共通性の違いとの対話」の6部で構成される。旧石器時代からローマ時代まで、各時代の鍵となる遺跡の研究がくわしく整理されているだけでなく、著者が論文化した成果や学史にまつわる挿話もあって、ふだんあまり馴染みのない時代の遺跡でもその理解をぐっと深めてくれる。

南ドイツの遺跡からは日本列島なら残りにくい有機質の証拠が豊富に見つかる。また日本と同様に、良好な層位堆積にもとづく考古編年が整備されている。日本では資料が欠落してしまうために不鮮明にならざるをえない活動内容を南ドイツの考古遺跡のパターンから類推する作業が可能になる。さらに、南ドイツは人間と環境との相関・因果の関係史を組み立てるうえで格好の地域である。氷河が後退して以降の景観の変化、それにともなう生活資源、道具行動や土地利用の変化を通時的に、そして具体的に観察でき、自然と人類の関係を例証するのに最適な条件がそろそろ。そういった理由から著者は南ドイツを比較のフィールドとして考えるのである。

そもそも考古学には「比較」と「分類」が基礎に

与えられている。しかし著者は、広域の比較についてはその方法が考古学では未発達な領分であると冷静に述べる。

たとえば私たちは石刃技術が日本列島にもドイツにもあることを知っている。また、本書に記されているように、城塞集落や墳丘墓など名称こそ違えども、彼我にはたいへんよく似た形態や構造をもつ証拠があることに気づく。けれども、似た要素だけをとり出してそれらの異同を調べるのが比較ではない。それは対照と呼ぶべきだろう。似た要素があるなかで、そこからどんな歴史的事実を見出したいのか、その目的が明示されていること、そのために適切な比較のセットが選ばれることが比較の前提として留意すべき点である。そして比較を通して、似た要素が互いにどんなコンテキストで生じているのか、その要素があらわれることで何が変化し、何が起こるのか（あるいは変化しない／起こらないのか）が明確にされねばならない。それぞれの要素が見出されるコンテキストの類似と差異を観察し、それらが生じた理由を説明することが大切である。

広域の比較の可能性を念頭に書かれた本書では、具体的な実践は示されていない。読者が自身のフィールドと比較できるテーマはないかと心当たりを探しつつ、各々で試みるのが良いかもしれない。そういう目で本書を読み直すと、いずれの内容も比較のフレームとして十分役立つことがわかる。私たちは比較を行うことによって、自国史の考古学からいったん離れ、考古学が広く問題とする、現生人類の出現、農耕の開始、社会の階層化、国家形成、都市化など普遍性のあるテーマに日本列島の考古学がどう貢献できるか真摯に考えることになるだろう。

また、これまで日本列島というコンテキストだけで議論されてきた仮説の当否についても点検の必要が出てくる。なぜなら比較は仮説検証の方法でもあるからだ。その反面で、広域の比較はまだ課題も多い。著者も述べるように、比較の基礎となる概念や用語の整理はその最たるものである。類似と差異についても、どの程度までの類似と差異を比較することに意味があるのか問われることだろう。多くの方々が本書でドイツ考古学の緻密な研究に触れ、その行間から比較考古学の可能性を嗅ぎとって、方法の幅を広げていってもらいたい。

(ニュースレター委員会 仲田大人)

お知らせ

日本旧石器学会入会申込み手続きについて

日本旧石器学会入会申込みにつきましては、入会

申込書を日本旧石器学会ホームページからダウンロード (<http://palaeolithic.jp/join.htm>) し、必要事項を記載の上、日本旧石器学会事務局へ郵送してください。入会資格審査にあたっては論文等著作物の提出を求める場合があります。ご協力ください。

メーリングリストの運用について

日本旧石器学会ではメーリングリストの運用を行っています。これは学会からの連絡手段として利用するとともに、情報交換の場として活用していくために設けたものです。みなさまへの円滑な情報共有のため、学会員のメーリングリストへの登録は、原則として義務化しております。

まだメーリングリストへの登録のお済みでない方は、携帯電話のメールアドレスでも構いませんので、事務局のメールアドレス (jimu@palaeolithic.jp) までお知らせください。

会費納入・住所変更手続きのお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されていますので、会費は原則前納制としております。

ニュースレター同封の払込取扱票を用いて、今年度分会費の納入をお願いします。振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号00180-8-408055です。全国の郵便局で簡単に手続きいただけます。会費は6,000円です。

また、会費滞納は本会運営に大きな支障を招く原因になりますので、前号同封の会費納入状況表をご確認のうえ、2023年度以前の会費を未納の方は、未納分もあわせて納入をお願いいたします。

転居をされた方は、必ず住所変更の手続きをお願いいたします。郵便局に転居届を出されていても、本会では郵便局以外の配送会社を利用していますので転送していただけません。会費納入の際に払込取扱票に新住所を記載いただくか、または事務局までメール等でご連絡ください。

日本旧石器学会ニュースレター 第56号

2024年4月30日発行

編集：日本旧石器学会ニュースレター委員会

赤井文人・仲田大人・山田和史

発行：日本旧石器学会

事務局：〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部 長崎潤一研究室気付

E-mail jimu@palaeolithic.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>